

Vol.7

台灣



東嶋和子の Energy満タン! 世界紀行



Vol.7

台灣

東嶋和子

Wako Tojima

科学ジャーナリスト・青山学院大学非常勤講師



台湾は日本と距離が近いだけでなく、気持ちも近い親日国。台北に住む若い女性が「くまモン」のスマートフォンケースを持ち、テレビドラマ「半沢直樹」にハマっているんです、と話したのには目が丸くなりました。彼女には、日本でも人気の飲茶や屋台、タピオカドリンクの店に連れて行ってもらいました。

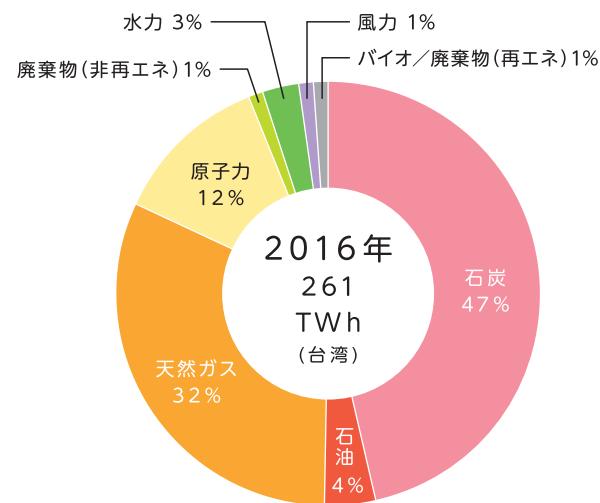
私の最初の訪台は1998年、「発掘イマリが語るアジア大航海時代」と題するルポの取材旅行でした。オランダ東インド会社によって輸出され、欧州の陶磁器に影響を与えた肥前磁器「イマリ(伊万里)」を追って、佐賀県有田からインドネシア、ベトナム、台湾へ。

南部の台南、高雄で出会ったのが、1624年、中国福建省の海賊出身の鄭芝龍(ていしりゆう)と長崎県平戸の日本人女性との間に生まれ、反清抵抗運動の中心人物となった鄭成功(ていせいこう)です。1662年、鄭は台湾からオランダを駆逐して英雄となりました。鄭氏時代の軍事、農業の拠点だった高雄の左営鳳山県清代旧城遺跡からは、イマリの出土が確認されています。鄭氏一族は、イマリのプロデュースと販売を一手に担い、大船団を率いて多角的貿易をしていたのです。

時代は下って、1895年からの日本統治下の台湾では、水力発電などの建設が進み、1919年には電力会社を統合して「台湾電力株式会社」が設立されました。日本の統治を外れた1946年には、国営の「台湾電力公司」になりました。

2016年の発電電力量構成は、石炭47%、天然ガス32%、原子力12%、石油4%、水力3%など。また、台湾経済部の統計では、2017年の発電電力量270TWhの7割を台湾電力が、3割を民間会社が発電しています。エネルギー自給率は10%(2016年)。2000年に石炭の生産を止めた台湾は、日本や韓国同様、アジアにおける化石燃料の主要輸入国になっています。

石油危機を経てエネルギー安全保障の観点から原子力開発を加速しましたが、一方で、二大政党が原子力政策で長らく対立してきました。左右に揺れていた針は、2011年の東京電力福島第一原発事故を機に「脱原発」へと傾きます。



2016年 台湾の発電電力量構成

<出所> World Energy Balances 2018 extended edition database, IEA

裏面に続く →



とりわけ、台北の北東約40km、太平洋に面した第4(龍門)原子力発電所に対する建設反対の声が高まりました。

2013年11月、日本の状況を話してほしいと、台湾に招かれました。焦点となっている龍門原発を訪問し、台北でシンポジウムに登壇する機会を得たのです。龍門原発(1350MW×2基)は1999年に着工し、当初は2004年の稼働を目指していました。訪問時は、燃料装荷を待つ段階でした。発電所長に伺うと、万一電源が失われても重力で水が流入して原子炉を冷却するなど、きめ細かい対策を施したこと。住民と親しく交わり、とくに所長のお母さんと女性グループが信頼し合っているのが印象的でした。

日台の女性によるシンポジウムでは、震災後各地の発電所を取材した時の状況を写真とともに紹介しました。なかでも、福島第一と同じかそれ以上の揺れと津波を受けながら、安全に冷温停止した東北電力女川原子力発電所の「成功」の要因を、私なりに分析して話しました。集落が壊滅状態になるなか、助けを求める住民を所内に受け入れ、3か月間避難所として生活を支えた実話も、生の声で伝えました。

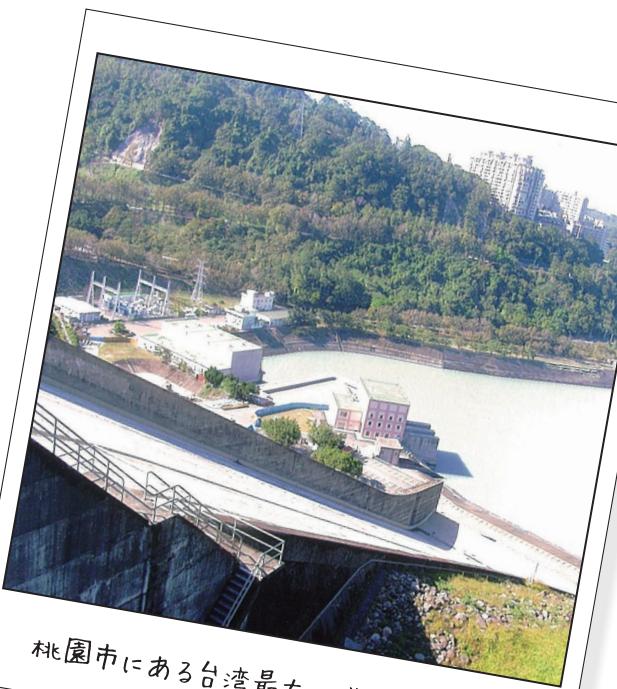
「女川の成功を奇跡だという人がいますが、私はそうは思いません。備えがあったからこそ安全に止まったのだ、と考えています」。そう講演を締めくくると、複数の記者が演壇に駆け寄ってきました。詳しく聞かせてほしい、と言うのです。驚いたことに台湾では、マグニチュード9の地震と津波に耐えた原子力発電所の存在がほとんど知られていなかったのです。

2015年、龍門原発の建設は正式に凍結されました。2020年に再選された蔡英文政権は、2025年までの目標として、既存の原子力発電所を40年の運転期限で閉鎖して総発電量に占める原子力の割合をゼロとし、再生可能エネルギーの割合を20%に引き上げる、としています。

(2022年4月)

●資料出典

『2021世界の原子力発電開発の動向』日本原子力産業協会
『平成30年度国際エネルギー情勢調査（諸外国のエネルギー政策動向及び国際エネルギー統計等調査事業）
諸外国のエネルギー政策動向に関する調査報告書 一 経済産業省資源エネルギー庁委託調査』日本エネルギー経済研究所
『みんなの知らない世界の原子力』海外電力調査会編著、日本電気協会新聞部発行



桃園市にある台湾最大のダム、石門水庫



龍門原子力発電所で発電所長と

PROFILE

東嶋和子 とうじまわこ／科学ジャーナリスト・青山学院大学非常勤講師

筑波大学卒。在学中、米国カンザス大学に文部省交換留学。読売新聞社科学部記者を経て独立。「いのち」をキーワードに科学と社会の関わりを追っている。主な著書に『水も過ぎれば毒になる 新・養生訓』『人体再生に挑む』『放射線利用の基礎知識』『死因事典』など。外務省外交フォーラム外務大臣賞、原子力学会社会・環境部会優秀活動賞受賞

